

# 花の進化園の植栽の見直しについて

濱谷修一

「花の進化園」は、特に被子植物を進化の道筋に沿って系統的に植栽し、花や実をはじめとする植物体の作りを来園者に比較観察してもらうことを目的として設置されており、最も「植物園」的な要素を持つコーナーのひとつである。系統進化についてはこれまでにいくつかのモデルが示されているが、本園では科の区分についてはいわゆる「新エングレー体系」に従っており、実際の植栽時にはインターネット上のウィキペディアで提供されている情報や、エングレーの区分に従って編集されている新牧野日本植物図鑑（北隆館）の記載を参考にした。

筆者は、平成20年4月から花の進化園の担当となったが、以下に示すようにコンセプトに合わないと感じられる点があったため、20年度、21年度の二年をかけてかなり大掛かりな植栽の見直しを行った。その結果を記録する。

## 当初の問題点

○植栽の管理上、長い年月の間に少しずつ植えている植物の位置が変わってしまい、系統進化のモデルに合致していない場所に植えられているものが多くなっていた。

○双子葉植物と比べて単子葉植物の植栽が単調になっていた。

○「観察」より「観賞」に視点が置かれた植栽エリアが多くなっていた。ボーダーガーデン的に前後2～3層に植物が植えられている場所が多く存在し、後列に植えられているものは観察路から離れているため間近での観察が困難となっていた。また、ラベルが手前の植物に隠れて見えないものが多くあった。

## 見直し後の植栽

○既存の植物を「新エングレー体系」にできるだけ沿うように移動した。主なものとしてウリ科、クマツヅラ科、スイカズラ科、サトイモ科、バショウ科、ショウガ科などが挙げられる。また、それまでに植栽されていなかった科を種子交換等により積極的に導入し、植栽した。主なものはヤマグルマ科、ツノゴマ科、ヤシ科などである。その結果、二年間に植栽された記録のある科は100科となった。

○単子葉植物の植栽については、20年度はユリ科の見直しに取り組んだ。花の進化園の中では比較的広い面積を占めているユリ科のスペースをさらに亜科で分けして植栽した。21年度はアヤメ科からさらに上位とされる科の配置の見直しに取り組んだ。特に、ラン科がシラン1種で広大な面積を占めていた一方で、サトイモ科、バショウ科などが狭い面積に押し込まれた状態だったため、シランを大幅に撤去し、下位の科の植栽場所をスライドさせながら、それぞれの植栽面積を広げ、展示種数の充実を図った。

○前後2～3層に植えられていることの問題を解消するため、可能な限り観察路から垂直に畝を立て、植栽した。その結果、多くの植物を間近で観察したり触ったりすることができるようになった。

○花だけでなく実のユニークなものや野菜などの植栽種数を増やした。

○今後、植栽している全ての科に科の解説を添える予定である。また、個々の植物には全てラベルをつけるのはもちろんのこと、可能な限り観察のポイントを示すように取り組んでいる。

## 今後の課題

### 1. 栽培技術の向上

新規導入の植物が多いこと、また、筆者が初めて扱う植物が多いことから、本来の特徴を出し切れなかったり、病気などで枯死した植物も多数あった。

### 2. 品目と栽培場所の定期的な見直し

植物の入れ替えに伴う「配置の乱れ」はこの二年の間にも発生した。当初のコンセプトを代々担当者が忘れないように常に気をつけるとともに、数年に一度は今回のように大掛かりに見直しを行なうことが必要である。

### 3. 新しい分類体系への対応

「新エングレー体系」などの形態情報に基づく分類体系はDNA解析に基づく新しい分類体系との間に異なる点があることが指摘されているが、この問題を園としてどうやって消化していくか時間をかけて解決していくことが必要である。

### 4. 栽培場所の物理的な問題

可能な限り新エングレー体系に沿うように植栽変更を行なったが、植物が大きくなりすぎて移植できないものがいくつかあった（ニレ科、クワ科、マツブサ科、モクレン科など）。解説の際に、配慮が必要である。

また、ウリ科やマメ科など、日照の問題などで生育が不良だったり、展示するために十分な面積を確保することが難しい例がいくつか見られた。花の進化園内で全てを解決するのは難しいので、人気のある品目については園内の他の適地で良好な状態で栽培・展示することも検討に値する。

マメ科やシソ科など（オジギソウ、ラッカセイ、ハーブの類など）には触ってもらうことを前提に植栽している植物がいくつかあるが、厳密に新エンゲラー体系に準じた位置では触ってもらうのに不都合なために、微妙に思いと異なる位置に植栽せざるを得ない部分があった。

### 5. 植栽区分と栽培管理の合理化

縦長の畝を作ったことは、多くの種類を観察しやすくした反面、灌水チューブの使用を困難にした。特に21年の夏は長雨の後に強い乾燥が続き、発根不良の株が乾燥にさらされたために植栽植物の傷みが激しかったと思われる。今後の管理方法の改善が必要である。

### 6. 解説部分の改善

「花の美しさ」というよりも「植物の面白さ」を楽しんでもらうべきエリアなので、解説板の充実はもとより、ガイドボランティアとの連携を深め、来園者に理解を深めてもらう努力が引き続き必要である。

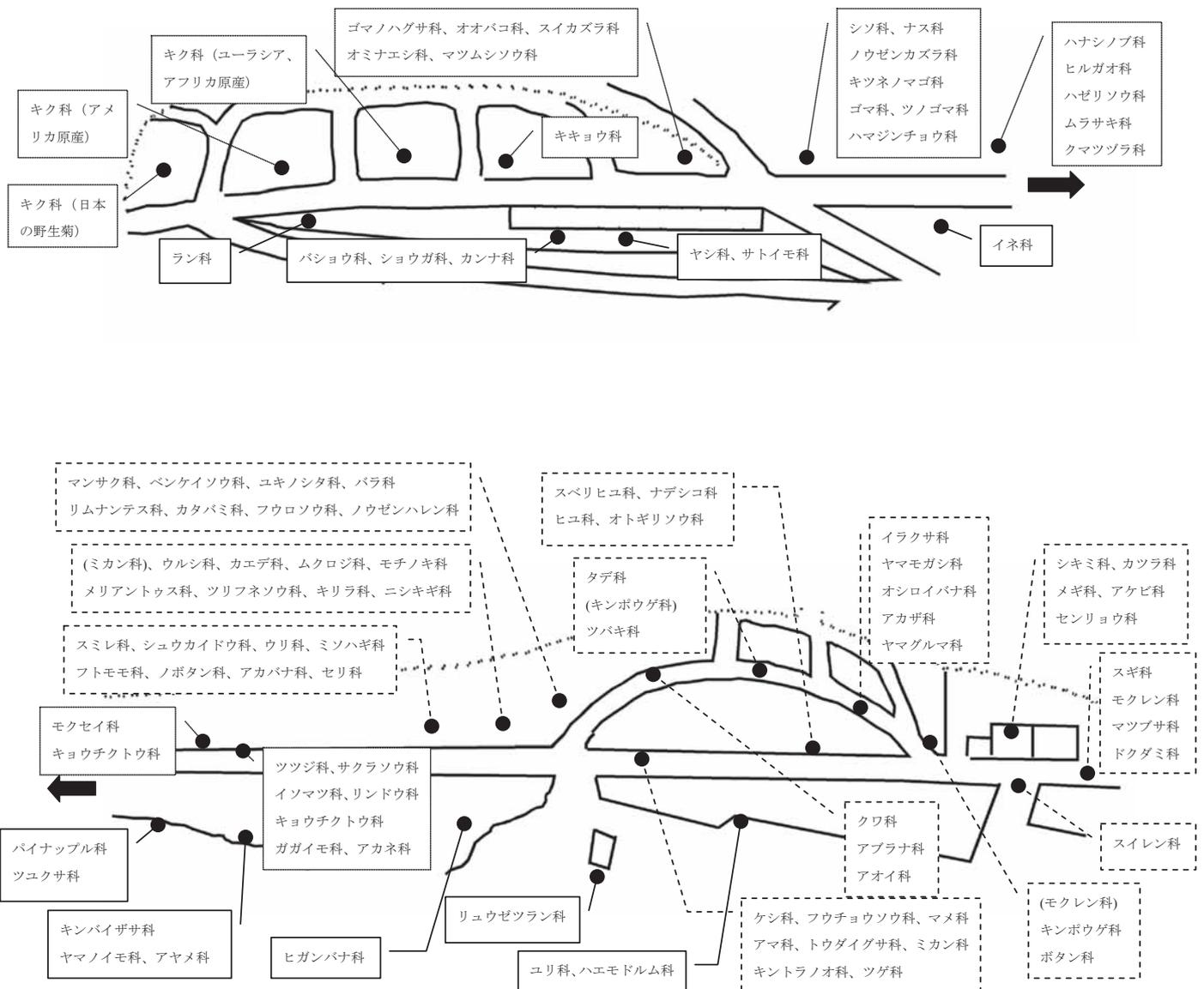


図. 花の進化園における平成 20、21 年度の植栽実績